

# 能登の現状を聞き学ぶ

## 北海道仏壮連盟 被災寺院など訪ね研修



た。他人事ではなく、わが事として考えなければならぬ」と話す。

阪神・淡路大震災や有珠山噴火災害、胆振東部地震などでボランティアの経験を持つ石本理事長(65)は、「復興への道のりは厳しく、またボランティアが必要だと痛感した。みんなが能登の現状を知ることが大事。道路の復旧を待たないといけないが、観光で能登を訪ねることも経済支援の一つになると思う」と語る。そして、「これからの我々にとって大事なことは、被災地で見たことを聞いたことを、感じたことを皆さんに伝え、そこから、わが事として何ができるかを考え、行動に移し、他の人にも輪を広げていくこと。そして、この先もいろんな形で継続的に被災地と携わり、つながり続けること。仏青、仏婦、仏壮でボランティアチームを作り、それぞれの得意分野でお手伝いしたい」と支援のあり方を語った。

4日には本山でも研修を実施。御影堂に参拝した後、清掃奉仕として、ごうきんを手にして堂内の畳や縁側を拭いた(写真左)。



「実際に自分たちで見て、感じて、被災地の今を伝えよう」と、北海道教区仏教壮年会連盟(石本要理理事長)の仏壮会員9人が12月2、3日、同教区の宇野哲哉教務所長と職員2人とともに能登半島地震で被害を受けた石川県を訪ね、研修会を実施した。

金沢別院(金沢市)に設置される能登半島地震支援センターでは、寺院や門信徒などの被災状況、物資搬送や復旧作業、サロン活動(茶話会)などの宗派ボランティア活動について、スタッフから説明を受けた。

また、能登半島北部の能登町を訪問。地震と津波に襲われ、本堂や鐘楼などが倒壊した法栄寺では、更地となった境内に唯一残る建物で、本堂から移されたご本尊に手を合わせた。この後、弘崎信正住職と坊守の

弘美さんが記録してきた写真43枚を見ながら、地震後の11カ月歩みを聞いた(写真右)。ほかにも、甚大な被害を受けた同町の松岡寺と高源寺を訪ねた。参加した胆振組仏教壮年会連盟会長の今村昭一さん(80)は、2018年の北海道胆振東部地震で経験した当時の土砂崩れや周りの家屋の崩壊を思い返し、「私が経験したものとスケールが違う。胆振は地震だけの被害だったが、能登は津波、そして9月には大雨被害もあった。大変だったと容易に推察できる」と話す。

紋別市の光源寺仏教壮年会・青木邦雄さん(71)は、父方が富山出身で、母方は輪島の前町がルーツ。先代の方々が暮らした場所なので、特別な思いを持って参加した。被災地の現状は想像していた以上にひどかつ